

ダ ル ニ ー

通
信

特集

スタディーツアー再開！



2p.3p. 理事長交代のお知らせ

4p. スタディーツアー事例① 株式会社ニコン

5p. スタディーツアー事例② 板倉ラオスの会

6p. スタディーツアー事例③ エフサステクノロジーズ労働組合

7p. ライオンズクラブ 海外支援事業セミナー&自転車支援

8p. 生活協同組合パルシステム神奈川 書き損じはがき勉強会

9p. タイ訪問記 山口 武信

10p. 民際センターのお仕事紹介！ Vol.1

11p. 支援者の声

12p. 事務局掲示板+事務局Q A +編集後記

2024 年 3 月 31 日付で秋尾晃正が理事長を辞任し、後任には児玉忠弘が就任することとなりました。創業から今日まで秋尾がその任を果たせたのも、皆様方のひとかたならぬご厚誼の賜物と存じ、謹んで深謝申し上げます。

■退任の辞

秋尾 晃正



1987 年に北海道民際交流センターを設立。翌年、日本民際交流センターに改名、一般財団法人になる際に、民際センターに。私が 1977 年に創設した北海道の「国際交流のつどい」は、「国ば超えてしゃんべるべや」のスローガンのもと、在日留学生と農家の労働交流・学校交流・地域交流などを行いました。これらは地方の草の根の活動として、戦後の国際交流史において画期的なもので、国際交流基金から第一回地域振興賞をいただきました。その後、北海道時代に出会ったタイ留学生の故郷であるイサン地方を訪問し、少女ダルニーとの出会いから奨学金の支援が開始しました。「教育支援」「民」「地方」の視点から海外での協力活動を目指し、タイでは EDF（地域開発教育基金）の名で活動。教育を基盤とした草の根活動を通し、貧困地域の自立を目指し、村の発展に貢献する地域開発の担い手育成が念願でした。タイでは各学校の自由な発想を基に一校一事業を促進、地域の発展に貢献しました。民際センターはただの奨学金提供団体ではなく運動体です。組織の運営には、思想家、運動家、企業家の要素が必要です。各国の経営者たちは、この三要素を身に付けた強者です。思想は、時代とともに、次世代に引き継がれます。

「戦争を知っている世代がいなくなったとき、日本は怖いことになる」という田中角栄の名言の如く、思想が受け継がれなくなった時は、怖いことになります。21 世紀でも、戦争・紛争、気候変動、貧富の差の拡大などの影響を受け、地球上には未だ教育を受けられない子どもたちが多くいます。「各国経営者は秋尾の下で、働いていない。秋尾の思想の基で運動に参加している」と、名言する次世代の経営者たちがいる限り民際センターは今後とも発展し続けるでしょう。

■就任の挨拶



この度、理事長に就任いたしました児玉忠弘と申します。当法人は、秋尾氏がタイでダルニーと出会ったことから始まりました。「人の出会いが歴史をつくる」です。彼は、貧しい家庭の子どもに義務教育修了の支援を届けるという素晴らしいシステムを創造しました。私自身もダルニーと、タイの事業所で数回お会いしたことがあります。2005～2008年、当法人の諮問委員としてタイのイサン地方とラオスに合計12回出張し、募金活動、奨学生との面談、自転車教室の開催、拳法講習、知事・教職員・中学生とのサイクリングを楽しみました。私の人生方針は3P：Passion（情熱）、Positive（積極的：肯定的）、Proactive（先を見越す）です。今後とも、皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

【プロフィール】

1946年大阪堺生まれ。広島修道高校を経て慶應義塾大学経済学部卒。学生時代は応援団長。ブリヂストン入社。子会社ブリヂストンサイクル移籍。ブリヂストンサイクルUSA社長。台湾アイデアルバイクを経て、ダホン社で副董事長。自転車業界56年。経験は、経営・マーケティング・販売。20年ぶりに民際センターに復職。



諮問委員時代(右から4人目)

株式会社ニコン ラオス現地視察

カメラやレンズなどの製造で有名なニコン様は、日本だけでなく世界各地にその製造拠点をもちます。カメラの生産工場の一つがラオスのサワンナケート県にあるご縁から、2014年より「ダルニー奨学金」を通じて、毎年同県内の中学生100名の就学を支えてくださっています。2023年12月初旬、コロナ禍で途絶えていたラオスへの視察を4年ぶりに実施することができました。視察には日本、ラオス、タイからそれぞれニコン社員代表の方が参加され、また民際センターからも日本、ラオスの職員が同行。奨学生の在籍校のうち2校と、奨学生4名の家庭を、2日間かけて訪問しました。



生徒が花の首飾りを手に校庭でお出迎え

学校訪問1校目は、県中心部から車で20分ほどの農村部にあるカオカード中学校。到着と同時に大勢の生徒が花道で出迎えてくれました。式典では、校長先生からの感謝の言葉やニコン様からのスピーチをはじめ、ラオスの伝統儀式であるバーシーも執り行われ、教師、奨学生、保護者、地元の方々総出で盛大に歓迎していただきました。

2校目のコンケン中学校は、さらに田舎にある小規模校でした。小さな村への海外からの来客は大変珍しいため、生徒からの歓迎や式典に加え、村の僧侶から感謝の意を伝えたいという申し出があり、急遽、村の寺院へもおじゃましました。



バーシーの儀式

また、家庭訪問ではニコンの方々が通訳を交え、奨学生と保護者へインタビュー形式でお話を伺い、学校生活、家事手伝い、生計の立て方、大変だと感じていることや将来の夢などについて具体的に知ることができました。奨学生たちは皆シャイでしたが、それでも言葉を選んでしっかり答えてくれる様子がとても印象的でした。

ニコンの皆様とともに、地域による学校の違いや、奨学金がどのように貧困家庭の子どもたちを支えているかを感じることもできた、貴重な視察となりました。

民際センター職員 林



奨学生宅訪問時のインタビュー

板倉ラオスの会

12回目のラオス研修旅行

群馬県板倉町で活動する「板倉ラオスの会」は、民際センター設立当初からタイのダルニー奨学金を支援し、1998年には「ラオスに学校をつくる会」を発足。町内外で募金を集め、2000年にパクトン村に小学校を寄贈しました。それ以後2017年まで隔年で村を訪れ、交流と支援を重ねてきました。

2023年11月に6年ぶりに同会の13名がラオス南部のセコン県パクトン村を訪れ、村の人々とこれまで以上に深い交流を行いました。6年前の洪水をきっかけに、村から離れた田んぼ近くに移住した人が多く、パクトン小学校の生徒数は約200人から48人に激減していましたが、皆が笑顔いっぱいでお迎えしてくれました。



全校生徒に文房具などをプレゼント

子どもたちと玉入れなど様々なゲームやサッカーをしたり、お母さんと日本の団子を作ったり、奨学生との面談や自宅訪問も行いました。7名中3名の奨学生が中途退学しており、卒業するのはまだまだ厳しい状況も再認識しました。また、学習の一環として、参加した3名の日本の小学生たちが朝早く起きて、村の子ど

もたちの労働を見学し、食器洗い、家畜の餌やり、米の脱穀作業を体験しました。

2007年から毎回参加している飯塚さんは、いつも写真を撮っては次回の訪問時に手渡してきました。今回訪れた川向このベンヤー小学校で2人の元奨学生が同校の先生になっており、そのうち一人は、飯塚さんと写っている写真を手にして彼を待っていました。そして泣きながら「奨学金がなければ、今の私はありません」とお礼を伝えてくれました。



早朝の労働体験

今も経済的に厳しい状況にあるラオス。この国が明るい未来を築いていくためには、教育支援がまだまだ必要です。支援の成果はすぐには現れず、長い年月がかかりますが、「板倉ラオスの会」の息の長い交流と支援はそんなラオスにぴったりです。今回、楽しい交流と同時に村の厳しい現実を見たことから、さらに今後もその支援が続くことを願っております。

民際センター元職員 富田



飯塚さんと先生になった元奨学生

再開!エフサステクノロジーズ労働組合

第 10 回ラオススタディーツアー 2024 年1月

ラオスの農村部の3校に校舎の寄贈を行い、その地域の生徒たちに継続して奨学金の提供をしてくださっているエフサステクノロジーズ労働組合様。隔年でスタディーツアーを開催し、社員の皆様が実際に子どもたちを訪問し、交流する活動を行ってこられました。コロナ禍でもオンラインイベントを開催して関わってくださっていましたが、今回は満を持しての現地訪問となりました。日本を紹介する紙芝居や、片仮名で生徒の名前を書く名札交換会、初めて目にする万華鏡作りなど、楽しい交流アクティビティを準備してくださり、生徒も先生も興味津々に日本から訪れた皆様を大歓迎してくれました。

参加者は15名。バンコク経由でウボンラチャタニーまで飛び、ラオスのパクセまで陸路で国境越えをするルート。トンネルを使い徒歩で国境を超えるのはスリリングな体験だったと感想をいただきました。2日目にはパクセにあるピアマイ小学校へ。きらきらと目を輝かせて迎えてくれた生徒たちの笑顔を見て参加者の皆様も「来てよかった」と言われていたのが印象的で、アクティビティも大好評でした。3日目は大移動日。ターケークまで1日かけて北上しました。4日目にはケムアン中学校を訪問し、バーシー（歓迎の儀式）と食事もふるまわれ、生徒たちともさらに交流することができました。日本へのオンライン中継も同時並行で行われ、来られなかった方々もオンラインで現地の様子をご覧いただけました。5日目にはラマラー小学校を訪れ、ここでも大歓迎を受けました。各校で奨学生と面談する機会もあり、両者が直接会って話す姿を見て、まさに1対1で繋がる支援だと私自身も感じ感動しました。もりだくさんなツアーでしたが、皆様が日に日にラオスを好きになっていかれる様子を見てとても嬉しかったです。初参加の方や何度も参加されている方もいらっしゃいましたが、皆様とお話する中で、支援を継続していく重要性をとて感じさせられました。

民際センター職員 米澤



参加されたエフサステクノロジーズ労働組合の皆様



紙芝居を披露する参加者と生徒たち

ライオンズクラブ

「海外支援事業セミナー」

2024年2月26日（月）、東京新潟県人会館において、ライオンズクラブ国際協調・友好委員会様が主催する「海外支援事業セミナー」が開催され、50名近い会員の皆様が集まる中、「海外支援活動の一環として民際センターの活用方法」というタイトルで民際センター職員の米澤が講演させていただきました。ライオンズクラブ様からは、1989年からこれまでに1600口を超えるダルニー奨学金のご支援をいただいております。また、ラオスの校舎建設や図書館建設、ミャンマーのパソコン教室寄贈など、そのご支援は多岐にわたります。北は北海道から南は熊本まで31のライオンズクラブ様がこれまで活動に加わってくださっています。現在までのご支援についてのご報告や、今後のご提案などをさせていただくことができたと共に、集われた方々との関係も広がり、とても素晴らしい時間をいただきました。



セミナーの様子

「通学自転車支援」

2024年1月、東京武蔵野ライオンズクラブ様より60周年事業の海外貢献活動としてラオス・カンボジア向けの通学自転車計80台をご寄付いただきました。同クラブの秋本会長からは、「“We serve”（我々は奉仕する）というライオンズクラブの理念と、民際センターの“Education for all”（すべての子どもに教育を）は、通じるものがあります。私たちとしては、第一に子どもたちに喜んでほしいと思っています。そして、楽しんで使ってもらえると嬉しいです」とのメッセージをいただきました。贈られた自転車は通学用としてはもちろん、放課後友だちと遊ぶ時にも使われ、さらには家族の足としても利用されて生活を支えています。ご寄贈いただきました東京武蔵野ライオンズクラブの皆様、誠にありがとうございました。



通学自転車授与式でお礼の言葉を述べる代表の生徒たち



お礼をお伝えすることができました
（右：秋本会長）

生活協同組合 パルシステム神奈川の皆さんと 書き損じはがき勉強会&仕分けを行いました

pal*system
パルシステム神奈川



書き損じはがきを通じて23年間、「ダルニー奨学金」をご支援中のパルシステム神奈川。毎年2月になると組合員の皆さんへ配達を通じて書き損じはがき収集を呼び掛け、およそひと月で数千枚ものはがきが集められます。回収されたはがきは毎年、職員・組合員の有志の皆さんのご協力のもと仕分けされ、切手に交換後、民際センターへ届けられています。

この仕分けの作業に際し、2月下旬にお声掛けいただき、民際センターから組合員の皆さんに向けたミニ勉強会を実施いたしました。地元の会場をお借りして、私たちの活動や書き損じはがきが奨学金に変わるまでの流れについてご説明し、質疑応答を行いました。当日は大和市国際化協会「ママの会」の皆さんもご参加くださり、世界各国出身・日本在住歴数十年の方々から国際色豊かなお話も伺いながら、とても和やかな雰囲気となりました。勉強会後には参加者全員で回収はがきの仕分けを行いました。膨大なはがきの山が数十分後にはきれいに分別され、そのスピードの速さに大変驚きました。パルシステム神奈川が多くの地域の方々に支えられ、民際センターの活動にも賛同してくださっていることをあらためて感じ、深く感激した一日でした。ご準備、ご参加くださった職員および組合員の皆さん、ありがとうございました。

民際センター職員 林



勉強会の様子と、仕分けを待つ大量の書き損じはがき



複数のテーブルで手際よくはがきが分別されました



2024 年 2 月に、支援させていただいているティダラさんを訪ね、家族でバンコクの北東 560 キロメートルに位置するウドンタニを訪問しました。



学校訪問

ティダラさんの通う学校、CHUMCHON JAMPEE SCHOOL は、ウドンタニから車で約 1 時間の距離にありました。学校に到着すると、校長先生ご夫妻、担任の先生、英語の先生がティダラさんと一緒に素敵な笑顔で我々を迎えてくれました。学校は創立 100 年を超える長い歴史があるとのこと聞き大変驚きました。昼食には学校で飼っているニワトリの採りたて卵の卵焼きを出していただきましたが、とてもおいしくて子どもたちはいつも以上にたくさん食べていました。昼食後にティダラさんのご自宅を訪問した際には手織りの生地と枕をお土産としていただきました。生地は妻のスカートに仕立てて大切に着用する予定です。将来また訪問する際には、そのスカートを着用して訪問したいと思っています。



タイの奨学生と一緒に



参加後に娘さんが描いたイラスト

今回、直接会って話をし、一緒に時間を過ごせたことで、奨学金がティダラさんの役に立っているのだということを実感することができました。今までは写真でしか会うことができなかった遠くにいるティダラさんでしたが、今回直接会えたことで子どもたちは本当の姉妹と思うほど仲良くなることができました。

ティダラさんは、将来実業家か公務員になるという夢を実現するために頑張っているとのことでしたので、その夢に向けて微力ではありますが、引き続きサポートできればと考えています。

最後になりましたが、訪問を調整いただいた民際センターのスタッフの皆さまと、ウドンタニから学校まで車を出してくれた友人に感謝いたします。



奨学生の自宅訪問



民際センターの

お仕事紹介！vol.1

ICTエンジニア：ダン ヴェット チョウ

ベトナム出身 妻と子ども2人

来日は11年目

民際センター在籍6年



ICT の仕事とは？

民際センターをサッカーチームで例えると、FR（Fund Raising：寄付集め）の仕事はフォワード、ICT（Information and Communication Technology）はゴールキーパーです。

仕事は主に

- 支援者様の寄付データ管理
- 支援者様の寄付と生徒のマッチング
- 現地職員と協力し、支援者様へ証書や写真の送付
- ダルニー奨学金キャンペーンや継続・新規生徒支援のお知らせ

システム基盤は専門会社に委託するのではなく、民際センター職員が運用してきました。基本的には24時間365日、寄付サイトを稼働できる体制です。

支援者へお伝えしたいこと

いつも民際センターをご支援いただきありがとうございます。もしお知り合いの方にICT専門家がいらっしゃいましたら、ボランティアまたはプロボノとして民際センターに力を貸してください。

今後の目標

支援者様からお預かりした貴重なご意見にしっかり応えていきたいです。例えば、証書へ生徒の名前の読み方や身長・体重の更新日の記載、アンケートの充実、マイ・ページの改善、クレジットカード決済の簡略化、学校とやり取りを可能にする、領収書の電子化などなど、たくさんのご意見を受けています。支援者様のご要望に早く応えられるようICTとして業務改善を続けていきたいと思っています。

仕事をする上での課題は？

日本も現地事業所もICTの人材不足です。また、現地のICT職員は日本語が話せないため日本への発送作業はミスが起こりやすく、円滑なコミュニケーションを日々心掛けています。

仕事のやりがいは？

毎年3,000人以上のご支援者様とメコン5ヶ国の約9,000人の生徒を繋ぐ仕事はとてもやりがいがあります。

支援者の声

支援者の皆様からいただいたご意見の一部を、
民際センターからのメッセージとともにご紹介します。



W様／埼玉県さいたま市在住

🥚 ダルニー奨学金は現地で必要な教育費用に足りていますか？

→ 物価や為替の変動が重なり、現在の 14,400 円では各国での就学に必要なすべての教育費用をカバーすることは難しくなっていますが、奨学金により中学就学が実現している生徒が大勢います。

近年の物価上昇・為替の影響などにより、奨学金額の見直しが必要となっていることはご指摘の通りであり、民際センターでも価格改定に向けて各国での調査・検討を慎重に進めている段階です。

M様／東京都渋谷区在住

🌊 支援した生徒が、卒業後にどうなったかを知ることができますか？

→ 奨学生全員の卒業後の進路を追うことは難しい状況ですが、前向きに検討してまいります。

民際センターの最大の特徴である「1 対 1 の教育支援」の良さをさらに感じていただくためにも、支援後の追跡ができれば理想的です。しかし、現在の民際センターと現地事業所の体制では、毎年約 1 万人弱のすべての奨学生の卒業後の進路を追うことは非常に難しく、支援者様全員に平等なご報告をさしあげることが困難な状況です。実現に向けて前向きに検討してまいります。

T様／神奈川県横浜市在住

🌊 支援先の学校と、メールで直接連絡できませんか？

→ 現時点ではご遠慮いただいています。

現地校宛のすべてのお問い合わせ・メッセージは、必ず日本の民際センター事務局へお寄せください。

支援先のすべての学校とのやりとりは、民際センターの各国事業所から地元の教育委員会を通じて行う必要があります。特に民際センターの支援対象である地方農村部では、現地職員が長い年月をかけて築きあげた信頼関係のもとに支援の受け入れが可能となっていることから、現地教育機関とのやりとりは現地職員に任せています。日本の事務局ではお問い合わせ内容の把握、各国事業所への伝達、回答を管理することで、現地との作業を分担しています。

マイ・ページをご利用ください

マイ・ページは、支援者様と奨学生、そして民際センターとのコミュニケーションを劇的に向上させるためのツールです。ご利用いただくことで、今までメールやお電話にて都度ご依頼をいただいていた支援者様の住所、電話番号、領収書発行先などのご登録情報の変更が、ご自身で可能になります。また、年に2回のEDFグループからの郵送物でしか確認することができなかった支援履歴、支援状況表、奨学生写真等を、PC又はスマートフォン、タブレットから確認することができます。未登録の方は是非とも、ご活用ください。

ご登録方法について www.minsai.org/oshirase/mypage

民際センターを紹介してください

皆様のブログ、SNS、ホームページなどで民際センターを紹介してください。ロゴや写真、記事の提供などは、事務局へご依頼ください。

プロボノ募集中

プロボノを募集中です。アドビ・イラストレーターを用いて広報資料(チラシやパンフレット)をデザインしてくださる方や、動画制作、動画編集ができる方を募集しています。また、現在特にライター(文章やキャッチコピーを考えてくださる方)も募集しています。ご興味のある方は、民際センターまでお問い合わせください。

「支援者の声」を募集しています

皆様の声を民際センターのホームページ「支援者の声」(www.minsai.org/activity/voice)やダルニー通信等でご紹介させていただきます。ご支援された経緯、奨学生とのエピソード等、文章、動画、何でも結構です。事務局までお寄せください。



Q 忘れずに支援するためにはどのような方法がありますか？

A クレジットカードによる寄付にて自動継続による引き落としをご選択ください。

Q 友人が「ダルニー奨学金の寄付を始めてみたい」と言っています。詳しい説明を聞くことができますか？

A お電話やメールでお問合せください。また、事前にご連絡いただければオンライン会議システムなどにより職員が直接ご説明いたします。

Q 終活を一緒に考えてくれますか？

A 相続による寄付、遺言書の書き方などの遺贈について、ご支援者様のご要望をお聞きしながら、専門家を交え一緒に考えさせていただきます。遺贈寄付のお悩み、ご質問にワンストップでお手伝いします。是非ご相談ください。

Q 支援している奨学生に会いに行くことはできますか？

A 基本的に可能ですが、各国の状況によります。訪問される場合は、必ず事前に民際センターにご連絡ください。現地事業所から各国の政府機関に申請し、許可が必要な場合があります。

Q 民際センターは、メコン5カ国を支援していますが、どの国を支援して良いのかわかりません。どの国が一番支援を必要としていますか？

A 民際センターが支援しているメコン5カ国の農村地域などはいずれも貧しく支援を必要としています。毎年の支援状況により国毎に不足の程度が変わりますので、その都度お問合せください。もしくは、ご支援の際に「一番支援が必要な国」とご明記ください。

事務局Q&A



編集 後記

年明けにラオス・タイ・カンボジアを訪れる機会がありました。ラオスとカンボジアでは奨学生たちが通っている学校を訪問し、生徒たちが教室いっぱいにギュウギュウ詰めで座って、すごい熱気の中、目をキラキラさせて学ぶ姿を見て感動しました。カンボジアでは生徒の自宅訪問も行いましたが、壁もないトタン板の屋根だけの暮らしをしているような生徒も実際にいて、普段どのような環境で生徒たちが暮らしているのかをこの目で見て何が必要なのかを感じて帰ってくることができました。先生や生徒たち、その家族から聞いたことを忘れず、彼らのためにできることをしっかり考えて日々の業務をしていきたいと思いました。

表紙の写真

ミャンマーの生徒たち



活動をご覧いただけます

f facebook.com/minsai.org
X twitter.com/minsaiorg
i instagram.com/edf_japan

郵便振替でのご支援は こちらからお願いします

ゆうちょ銀行
振替口座

00160-7-664928

▶「ダルニー」とは…民際センターが奨学金を募り1対1の教育支援を始めるきっかけとなったタイの女の子の名前。

ダルニー通信94号 2024年6月1日発行 発行人：児玉忠弘



公益財団法人

民際センター

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-6-13 山三ビル7F

TEL : 03-6457-5782 / FAX : 03-6457-5783 / MAIL : info@minsai.org / HP : www.minsai.org